与代目 桂春團治氏

スペシャルインタビュー

落語しか知らない男に 世間を教えてくれた北新地

〈略歴〉
与代目 桂 春團治
生年月日　1948年(昭和23年)7月20日
本　　名　山城　彰(やましろ　あきら)
襲 名 歴
桂 春章(1965~1968年)
与代目・桂 春之助(1968~1993年)
桂 春之輔(1993~2018年)
与代目・桂 春團治(2018年~)
初 舞 台
1968年(新世界新花月)

♫酒も呑めなきゃ 女も抱けぬ そんなど阿呆は死になされ♫…などと唄にも詠われ、その破天荒な生き様までもが多くの人を魅了した初代・桂 春團治。稀代の名跡を受け継いだ与代目が、冷めることのない〝北新地 愛〟を熱く語ってくださいました。

私は高校卒業と同時に三代目・桂春團治の内弟子となり、桂 春章の名前をいただきました。北新地へは昭和44~45年頃に、三代目師匠のご贔屓さんに連れてきてもらったのが初めてでした。お店の名前は忘れましたが、高級クラブだったかと思います。その時に言われたのが、「将来大きくなったら、このようなお店に出入りができるような存在にならなぁ、あかんで!」と。そしてご祝儀までいただいたことを今でも覚えてますわ。高校卒業と同時にすぐ内弟子になりましたから、新聞配達や牛乳配達位のアルバイトしかしたことのない、全くの世間知らずでしたから、北新地がどのようなところかなんて想像すらできませんでした。

その後、春之助時代にはテレビに出してもらえるようになり、顔も少しずつ売れてくると、ご贔屓筋に新地の色んなお店に連れて行ってもらいました。そのお陰で名前と顔を覚えてもらうことができました。厚かましくも「新地で俺を知らん店はもぐりや!」なんて豪語してましたわ。甲斐性なしで、自分のお金で行ってないくせにね(笑い)。

本当に多くの人に可愛がってもらいました。この商売ならではの役得ですなぁ。お店のママも出世払いのような雰囲気で、「早う、えろうなりや」と…。新地に育ててもらったという想いは強いですね。この街(北新地)は、楽しい思い出いっぱいのありがたい所です。

落語以外の世間の常識とかマナー、ルール等を教えてくれたのも北新地でした。ある店にご贔屓筋とタレントの川崎敬三さんとで入ったんですが、たまたま別のテーブルに顔見知りの方がおられ、挨拶がてら席に座り水割りを一杯ご馳走になったんです。その光景を見ていた川崎さんが、戻ってきた私にえらく不機嫌な顔で「大阪の芸人さんは、そんなことをするんだ」と言われました。会釈程度ならいいが、水割りをご馳走になるのは今日のご贔屓さんに失礼だ、というのです。確かに言われてみればそうですね。

もう一つの話は、お客さんと同伴した女性が座ったカウンター席の隣に、たまたま馴染みの男性が入ってこられタバコを取り出されたので、彼女が火を点けたそうです。すると同伴していたお客さんが彼女をすごく叱責したと…。彼女は自分がなぜ怒られたのか、理由が分らずキョトンとした状態だったそうです。

そりゃそうですわな。お客さんに連れて行ってもらってるお店で、いくら馴染みのお客さんと出会ったからといって、その人にサービスをするのはお門違いです。私が川崎さんに怒られたのと同じですわ。

東京の銀座と大阪の北新地はよく比較されがちですが、〝匂い〟が違いますな。大阪の街の匂いが北新地にはあります。東京の古今亭志ん朝（三代目）さんが、「大阪に来るとほっとするんだよ。『お帰り…』と言ってくれているようで、大阪弁に和むんだよ」と、よく言われてました。ただ、その後に一言、「何だよ、近頃の大阪は！」が必ず付いてましたが…。大阪弁の温もりや疲れた身体を優しく包み込んでくれる人情深さが薄れていくのを危惧されていたんでしょうね。

北新地はいつまでも「憧れの場所」であってほしい。「新地にいくぞぉ！」と誘われた時に、服装に気を配り、好きな女性を口説くような一種の緊張感が湧いてくる、そんな気持ちにさせてくれる存在であり続けてほしいですな。これにはお客さんとお店との共同作業が必要なことは言うまでもありませんがね。